

# 万葉集漢文漢字総索引

目 次

凡 例

本 編 ..... 1 ~ 1060ページ

校異一覧 ..... 1061 ~ 1067ページ

後 記 ..... 123ページ

巻別字母集計表並びに部首索引 ..... 20 ~ 122ページ

総 画 索 引 ..... 13 ~ 19ページ

字 音 索 引 ..... 1 ~ 12ページ

## 凡 例

1. 本書は、西本願寺本萬葉集（複製本 主婦の友社1984年刊）を底本とし、原文を改訂したのちの、歌句外の本文を対象とする語句索引を兼ねた漢字一字索引である。
2. 本書でいう歌句外とは、和歌における各句とこれにともなった異伝歌句とを除外したところの、いわゆる漢文表記形態を指し、題箋・巻号・部立・標目・題詞・序文・漢詩文・歌詞注記・左注・脚注及び目録をいう。
3. 本編の項目を、「【字】母・「本文」・「巻」数・「部」立・「旧番」・「新番」・「所在」・「分割」番号・校異「\*」印の順に立てた。
4. 見出しの漢字【字】母は、初出時に字母「コード番号」・「部首」・部首の「画」数を掲載し、同一の字母が次頁に及ぶ場合には、全頁にわたり頁の一行目左【 】内に示した。また、本文単位中での位置を「印」をもって示した。
5. 「本文」は十八字までを1単位とし、それ以上にわたる本文は分割して掲載した。従って、本文が十九字未満の場合は「分割」番号を「0」とし、末尾に「。」を付した。十九字以上で、例えば3単位に分割した本文は、分割番号「1」「2」の末尾は「。」を付し、それぞれに本文が継続中であることを示し、「3」の時「。」を付して、本文の終わりであることを示した。なお、原文の割注は一行書きとし、1単位中での区切り記号「・」「。」を必要に応じて用いた。
6. 本文中の重点（おどり字々）は、不定の一文字を示すため、すべて元字に置換し、元字字母で作成した。ただし、「云々」のみは、「云云」とはせずに「云々」の一字で作成した。
7. 見出し【字】母の配列順序は、諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店1968年刊）の「文字番号」に準拠した部首順とし、「云々」は「云」の次に置いた。

8. 「本文」の配列順序は、当該字母である 印につらなる文字列を一まとめにして、語句索引をも兼ねたため、 印を基点として部首順と五十音順と国歌大観番号順との三方式を併用した。

1 単位中での本文が 印で終わり、接続する文字列が存在しない場合は、見出し【字】母配列下の先頭から国歌大観番号順に配列した。 例 . 977 ページ

【字】	ヨ	ト	部	画	巻	部	旧番	新番	所在	分割
【類】	1849	[ 頁 ]	-	[ 09 ]						
	本	文								
	若夫	群生	品		5	雑	+896	+900	沈文	134
	水松	之			17		4021	4045	歌中	0
	凡如此	下	皆放焉。		9	雑	1719	1723	左	5

1 単位中での当該字母である 印の位置にかかわらず、 印に接続する文字列が存在する場合は、 印以降の文字列を諸橋轍次『大漢和辞典』の「文字番号」に準拠した部首順に配列した上で、さらに国歌大観番号順に配列した。

例 . 977 ページ

【類】	右一首	歌古事記与	聚歌林、	2	相	90	90	左	1
	但山上	憶良大夫	聚歌林白、	1	雑	6	6	左	2
	右砦山	上憶良大夫	聚歌林白、	1	雑	7	7	左	1
	右砦山	上憶良大夫	聚歌林白、	1	雑	8	8	左	1
	右砦山	上憶良大夫	聚歌林白、	1	雑	12	12	左	1
	右二首	歌山上憶良大夫	聚歌林白、	1	雑	18	18	左	1
	右一首	山上臣	憶良 聚歌林白、	9	雑	1673	1677	左	1
		聚歌林白	檜隈女王怨泣澤神社之歌也、	2	挽	202	202	左	2
	右一首	歌山上	憶良臣 聚歌林載焉。	2	相	85	85	左	0

異伝注記語句のうち歌句をともなう場合は、その初句を平仮名で示し、 方式の部首順で配列したのち、国語辞典方式の五十音順に配列した上で、さらに国歌大観番号順に配列した。 例 . 521 ページ

【或】	右二首	者	云紀皇女薨後山前王、	3	挽	425	428	左	1
			云車持朝臣千年作之也。	6	雑	953	958	左	2
			云えだもたわたわ。	10	雑	2315	2319	歌伝	1004
			云おもほしけめか。	1	雑	29	29	歌伝	1016
			云かすみたつ。	1	雑	29	29	歌伝	1033

9. 「部」とは各巻に施された大目の部立の略号を示す。ただし、部立のうち「遣」とは巻十五の遣新羅使人歌、「贈」とは巻十五の中臣宅守と狭野茅上娘子との贈答歌、「防」とは防人歌であり、題箋及び巻号と防人歌を除く巻十七以降の巻末四巻とは、空白とした。部立の略号は、次の通りである。

雑 = 雑歌      挽 = 挽歌      問 = 問答 ( 歌 )      正 = 正述心緒歌      旋 = 旋頭歌  
 相 = 相聞      譬 = 譬喩歌      悲 = 悲別 ( 歌 )      寄 = 寄物陳思歌      羈 = 羈旅發思歌



2). 底本の異体字・省画字で、新字体に統一できるものは、これを字母とした。  
例．乗・乱・争・伴・具・内・冬・塩・庭・得・戸・望・朝・次・為・益・礼・緑・  
美・羽・舎・葳・調・遅・道・随・青・須・飯・騰・黒

3). 底本に旧字体で書かれてあるもので、旧字体に統一できるものは、これを字母とした。

例．傳・價・兒・兩・勞・國・圓・圖・壽・實・寫・對・帶・廣・應・戀・變・會・  
樂・歡・歸・氣・澤・濱・瀧・獨・當・盡・聲・舊・藝・處・覺・譽・讀・賣・  
邊・驛・龜

4). 2)と3)の場合であっても、底本に二通り以上の相異なる使用字体があっても、それぞれを使用するものは、これらを字母とした。この場合、初出【字】母行に参照として字母相互の対コード番号と対字母を掲載した。

例．一\_壹・万\_萬・与\_與・付\_附・余\_餘・舞\_舞・嘆\_歎・坐\_座・弓\_氏・  
知\_智・祈\_禱・纒\_纒・贊\_讚・茨\_黄・躰\_體・預\_豫・  
岳\_岡\_崗・舟\_船\_舶

5). 底本及び古写伝本に二通り以上の相異なる使用字体があっても、独自に統一して字母とした。

例 a. 云々「云々」云々・麻呂「麻呂」麻呂 曆「曆」曆

b. 吐「吐」吐 壯「壯」壯・弁「弁」弁 從「從」從 從・懷「懷」懷 懷・挿「挿」挿 挿・  
滿「滿」滿 滿・繩「繩」繩 繩・來「來」來 來・顯「顯」顯 顯・飲「飲」飲 飲・

c. 寶「寶」寶 寶・巖「巖」巖 巖・擧「擧」擧 擧・鬱「鬱」鬱 鬱・濟「濟」濟 濟・  
經「經」經 經・虫「虫」虫 蟲・輕「輕」輕 輕・遙「遙」遙 遙・鴉「鴉」鴉 鴉・

d. 哥「哥」哥 歌「歌」歌・鶯「鶯」鶯 鶯

15. 本書は、拙編『万葉集歌句漢字総索引』上・下 (桜楓社1992年刊)と以下の本文について、その用例が重複している(所在は旧国歌大観番号による)。

- 巻2 - 90番 - 短歌脚・歌詞注記「山多豆」
- 巻3 - 431番 - 題詞脚・歌詞注記「可豆思賀能麻未能弓胡」
- 巻13 - 3284番 - 長歌左・歌句別案「いもにより者」
- 巻16 - 3817番 - 短歌脚・歌詞注記「多夫世」
- 巻16 - 3839番 - 短歌脚・歌詞注記「佐我礼流」
- 巻16 - 3853番 - 短歌脚・歌詞注記「賣世」
- 巻17 - 4017番 - 短歌中・歌詞注記「安由乃可是」
- 巻18 - 4106番 - 長歌脚・歌詞注記「佐夫流」
- 巻19 - 4169番 - 長歌脚・歌詞注記「美於毛和」

16. 本書の巻末に底本の文字を改めた際の「校異一覧」を付した。

17. 本書の巻末に目録(上段)と本文(下段)の「巻別字母集計表」と部首による検索のための索引を付した。なお、ここに付されたコード番号は、本編のコード番号と一致する。

18. 本書の巻末に総画数による検索のための索引を付した。

19. 本書の巻末に字音による検索のための索引を付した。